

第1回ナイトウォーク活動レポート

○概要

- ・日時: 11/29(土)21:00 ~ 11/30(日)7:00
- ・実施場所: 土気駅～いなげの浜
- ・主催: NPO法人ToBiRa
- ・参加人数(子ども7名、スタッフ5名)
- ・実施ルート [ToBiRaナイトウォークマップ - Google マイマップ](#)

○教育的目的・ねらい

本活動は、夜間の街を歩く非日常体験を通じて、以下の力を育むことを目的としました。

(目的) 非認知能力を高め、継続的に成長し続ける基盤づくり

(目標) キーターゲット

- ・協働力・・・仲間とゴールを目指して共に協力する
- ・共感力・・・仲間と困難を共に経験することで育まれる。
- ・レジリエンス・・・約30kmを歩くという困難な体験に出会うなかで困難を乗り越える力がつく。
- ・感性・・・スマートフォン等の現代の便利な利器から離れ、苦勞することで、自然他者への感謝の心が磨かれる

○子どもたちの様子

・きのこグループ

初めて会う人同士でもすぐに打ち解け、終始楽しい雰囲気では歩いていました。その中でも様々な気づきがありいつも歩いていた道路に対しての見方が変わったという発言もあった。最後は疲労感もかなり溜まった様子だったが全員でゴールし達成感を焚き火時間に味わっていたようだった。

・たけのこグループ

最初は緊張気味だったが、時間が経つにつれてグループ内でゲームをして緊張が解けていく様子があった。途中迷子になるというハプニングがあったが、そのハプニングがより一層仲間との対話を生むことになった。ゴール前には最後の力を絞り全員で無事ゴールし、焚き火時間ではきのこグループ同様に達成感を味わっていた。

○子どもたちの声(アンケートより抜粋)

- ・大変だったけどめっちゃ楽しくてまたやりたいと思いました。
- ・楽しかったし辛かった。
- ・色々な人と交流できて楽しかったし、疲労よりも達成感の方が大きかった。

○保護者の声

- ・達成感に溢れていました！ 疲労感以上にやり切った満足感と、ゴールした事で自信がついたようでした。
- ・困難な事にチャレンジして、ゴールしてもしなくても、チャレンジした事自体が素晴らしいと
いうことを知る良い機会だと思いました。

○教育的課題と今後の教育的観点

①焚き火での振り返り時間が消化時間になってしまったこと。

「体験の意味づけが十分に行われず、内省の機会が形式的になってしまった」

→デューイの経験主義によれば、経験は「反省的思考(reflective thought)」を通じて初めて学びとなる。今回の焚き火の時間は、身体的疲労や時間的制約もあり、参加者が自らの体験を深く振り返るには不十分だった。また、大人側が「子どもの言葉を待つ」ことに重きを置きすぎた結果、言語化の支援が不足し、思考の深まりを促す問いかけやモデルとなる語りが欠けていた。

②心理的障壁があった

「スタッフの心理状態が子どもに影響を与え、心理的障壁を作ってしまった」

→教育心理学において、「情動の共鳴性(emotional contagion)」は重要な概念であり、大人の不安や緊張は無意識のうちに子どもに伝わる。特にナイトウォークのような非日常的・挑戦的な場面では、大人の「在り方」そのものが教育的メッセージとなる。スタッフが「失敗してはいけない」「うまく進行しなければ」といったプレッシャーを抱えていると、子どもも「間違っではいけない」「迷惑をかけてはいけない」と感じやすくなる。

○今後について(第2回ToBiRaナイトウォーク開催に向けて)

- 第2回ナイトウォークは、参加人数を拡大した形で実施予定
- 開催時期: **2026年3月末**を予定
- より多くの青少年に「困難との出会い」を届ける機会とする
- 規模拡大に伴い、安全管理体制の強化とスタッフ配置の再検討を行う
- 第1回の課題(振り返りの質、心理的安全性など)を踏まえ、プログラム設計を改善
- 実践と理論の往還を重ね、活動の質的向上を図る

《写真》

出発: 土気駅南口



ゴール: いなげの浜

